

4 出土遺物

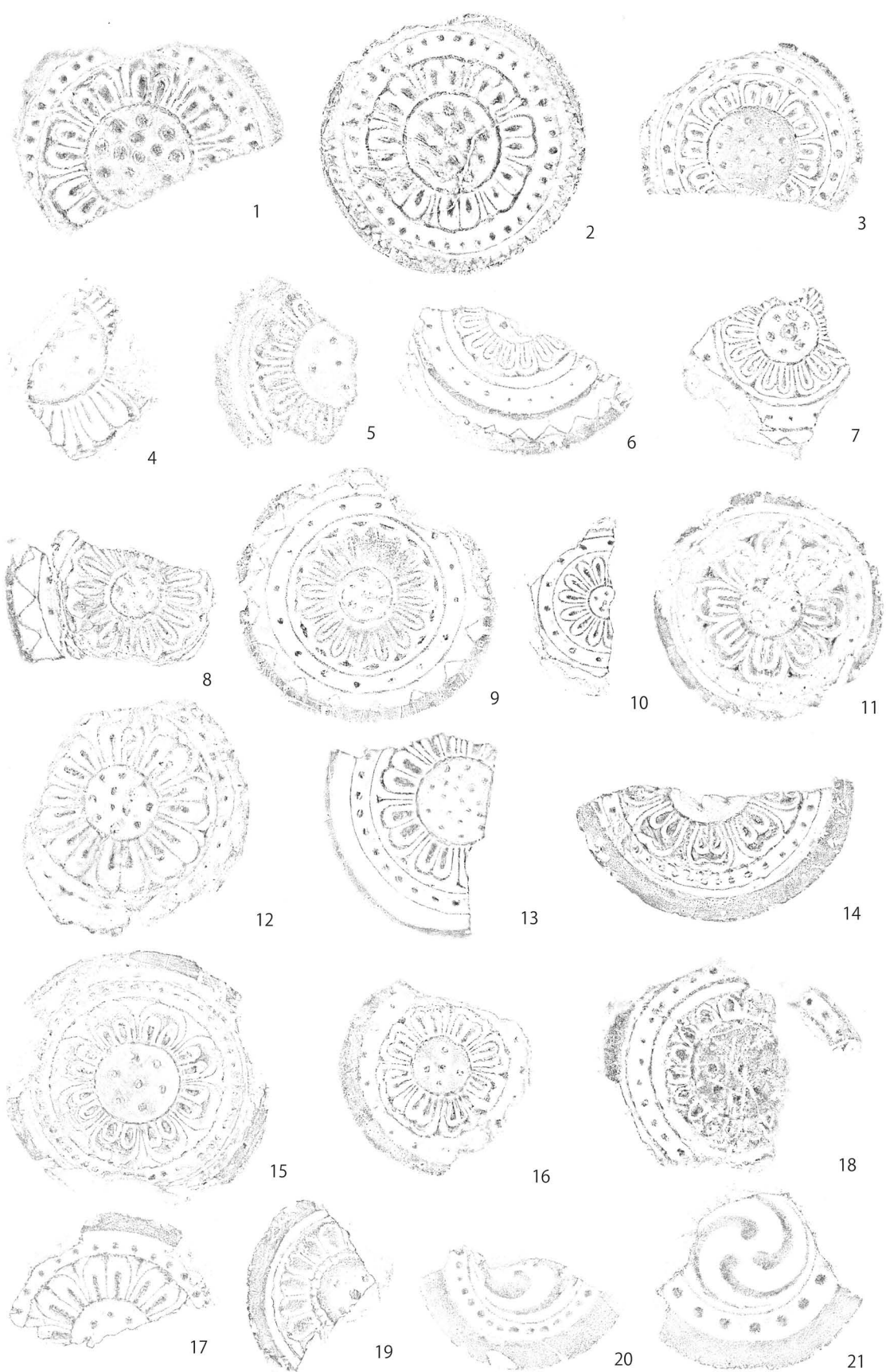
(1) 瓦埴類

整理用コンテナ約2100箱もの膨大な量が出土した。これらは現在も整理作業中であり、ここでは主要な軒瓦および鬼瓦、隅木蓋瓦について報告する。軒瓦や鬼瓦は、『薬師寺報告』の型式に準拠したが、奈良時代のものは、『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』（奈文研 1996）の型式番号も示した。

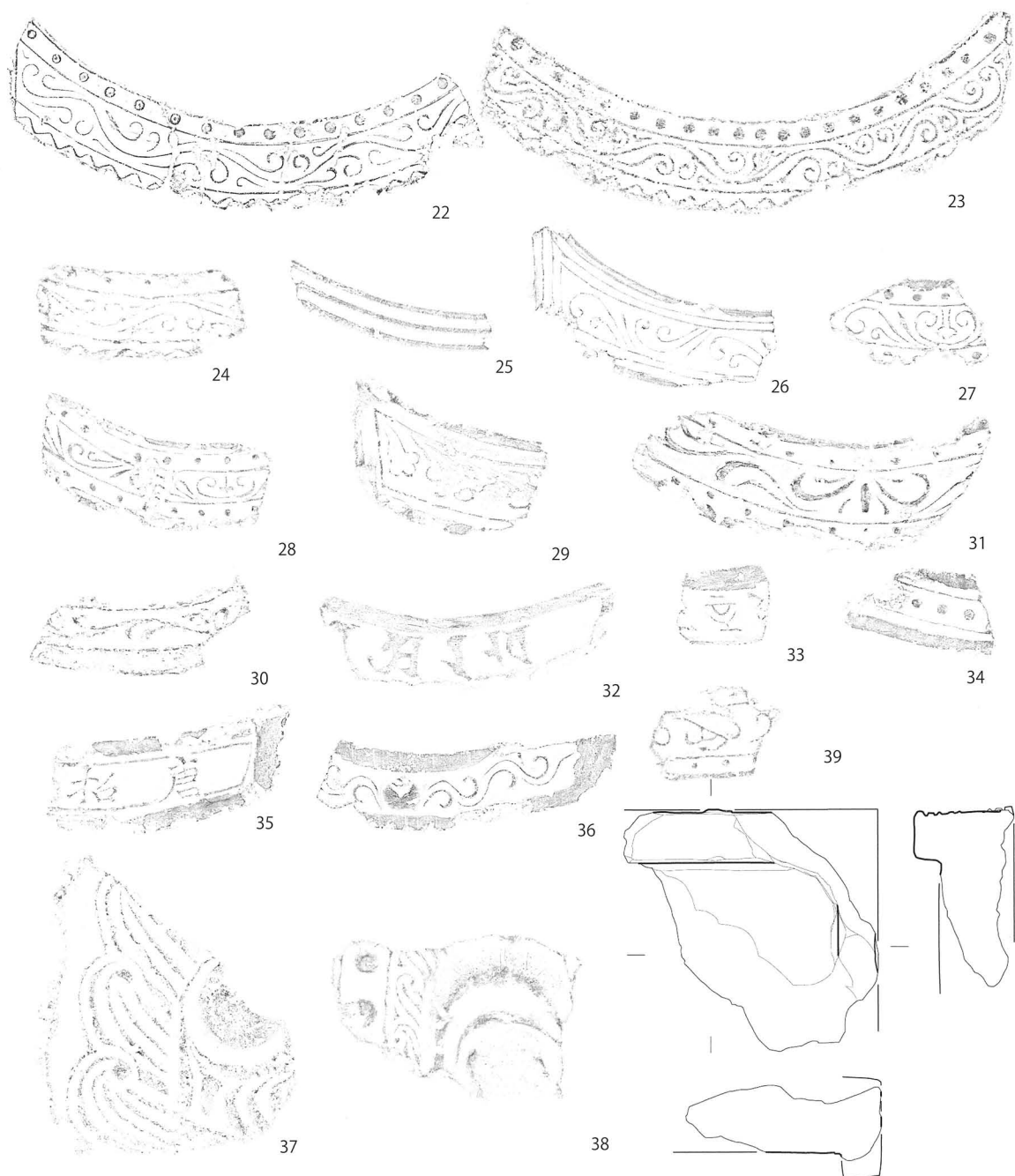
軒丸瓦 1～12は奈良時代の複弁蓮華文軒丸瓦。1～3は本薬師寺および薬師寺の創建瓦。1は薬師寺2 a (6276 A a) 型式。SK3132出土。2は薬師寺2 a 型式の範を彫り直した薬師寺2 b (6276 A b) 型式。最も多く31点出土した。3は薬師寺3 (6276 E) 型式。小型で裳階用の軒丸瓦。SD3111出土。4は外縁が素文になる薬師寺6型式。5は薬師寺9 (6225 E) 型式。外縁と外区の境に2重の界線をめぐらす。SK3133出土。6は薬師寺13 (6282 H a) 型式。7は6284 E b 型式。SK3118出土。6284 E 型式は薬師寺では出土例がなかったが、本調査で3点出土した。8は薬師寺18 a (6304 E a) 型式。SD3122出土。9は薬師寺18 a 型式の範を彫り直した薬師寺18 b (6304 E b) 型式。本調査では薬師寺2 b 型式に次いで26点出土した。10は薬師寺19 (6307 C) 型式。小型の軒丸瓦。11は薬師寺33型式。12は薬師寺35型式。13～19は平安時代の蓮華文軒丸瓦。13は薬師寺37型式で中房の蓮子を不規則に配する。SK3132出土。14は薬師寺38型式。15は薬師寺39型式。SK3107出土。寛弘2年(1005)に再建された食堂の所用瓦である(『薬師寺概報Ⅰ』)。本調査では4点出土した。16は薬師寺44型式。17は薬師寺61型式。18は薬師寺68型式。19は食堂の調査(第500次)で初めて出土した新型式(『薬師寺概報Ⅰ』)。ただし興福寺で同範瓦がある。SD3123出土。20・21は室町時代の巴文軒丸瓦。20は三巴右巻文の薬師寺128型式。中央に珠点が痕跡程度残る。21は三巴左巻文の薬師寺170型式。

軒平瓦 22～29は奈良時代。22～25は本薬師寺および薬師寺創建瓦。22は薬師寺201 (6641 G) 型式。22はSK3134出土だが、薬師寺201型式は十字廊の壺地業掘方や羽目石据付溝SX3126からも出土している。また、平瓦部凸面に朱線のあるものがある。本調査の中では最も多く90点出土した。23は薬師寺202 (6641 H) 型式。SK3106出土。薬師寺201型式と同様凸面に朱線のあるものがある。薬師寺201型式に次いで数が多く、36点出土した。24は薬師寺203 (6641 I) 型式。やや小型で裳階用と考えられる。25は薬師寺209型式。型挽きの三重弧文軒平瓦である。SK3118出土。26は薬師寺214 (6663 H) 型式。上下外区脇区と内区の境に二重の界線をもつ。SK3118出土。27は薬師寺218 (6664 O) 型式。6点出土。28は薬師寺224 (6685 F) 型式。29は6801 A 型式。修理司製作の瓦であり、薬師寺では初の出土である。ほかに修理司関連の瓦として、丸瓦に刻印された「理」cが出土した(山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢Ⅲ』奈文研 2002)。30・31は平安時代。30は薬師寺252型式。31は薬師寺255型式。SD3122出土。32は平安時代末から鎌倉時代の薬師寺285型式。瓦当面に左から梵字で風・水・地・火・空を意味する「カ・バ・ア・ラ・キャ」を配する。SK3135出土。33～35は鎌倉時代。33は薬師寺307型式。東院堂の瓦で瓦当面に「薬師寺東院弘安辛巳」の銘から、弘安4(1281)年のものである。34は薬師寺314型式。瓦当面に珠文をもつ。35は瓦当面に「唐招提寺」の銘をもつ軒平瓦。薬師寺に出土例はないが、唐招提寺79型式と同範(奈良県教育委員会・建築研究会『唐招提寺防災工事・発掘調査報告』唐招提寺 1995)。36は室町時代の瓦で薬師寺359型式。中心飾りに宝珠文をもつ。

鬼瓦・隅木蓋瓦 37・38は奈良時代の鬼瓦。37は鬼身文鬼瓦1。体部の巻き毛と右足部分の破片。SD3124出土。ほかに同一箇所破片が1点出土した。38は鬼面文鬼瓦A。右頬から口、巻き毛



第19図 出土軒丸瓦 (1 : 4)



第20図 出土軒平瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦（1：4）

の顎髭および外縁の珠文が一部残存する。西大寺に同範品があり（奈良県教育委員会・奈文研『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺 1990）、西大寺の創建年代から奈良時代後半のものとわかる。SD3122出土。鬼瓦は他にも中近世の小片が出土している。**39**は奈良時代前半の隅木蓋瓦。前面に花雲文をもつ。側面にも粘土を貼り付け顎部状に作り出す。同範で形状の異なるものが平城宮第一次大極殿院西樓の調査で出土している（奈文研『平城宮発掘調査報告XⅦ』2011）。

小 結 今回の調査では、奈良時代から近代までの瓦が出土したが、なかでも奈良時代の量の多さが

第2表 出土瓦集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式・種	点数	型式・種	点数	種類	点数
薬2 a (6276 A a)	7	薬201 (6641 G)	90	近世菊丸	1
薬2 b (6276 A b)	31	薬202 (6641 H)	36	丸瓦(刻印)	5
薬3 (6276 E)	5	薬203 (6641 I)	3	丸瓦(ヘラ書)	4
薬9 (6225 E)	2	薬214 (6641 H)	2	平瓦(刻印)	6
薬13 (6282 H a)	1	6663	2	隅切平瓦	27
6284 E b	3	薬218 (6664 O)	6	鬼身文鬼瓦 1	2
薬18 a (6304 E a)	7	薬224 (6685 F)	3	鬼面文鬼瓦 A	1
薬18 b (6304 E b)	26	薬229 (6702 G)	1	鬼瓦(中近世)	1
薬18 (6304 E b)	4	6801 A	1	鬼瓦(近世)	3
薬19 (6307 C)	1	薬209	3	鬼瓦	3
6309	2	薬236?	1	面戸瓦	3
薬006	1	薬239	1	平面戸瓦?	1
薬033	2	薬243	1	駝斗瓦	3
薬034	1	薬245	1	隅木蓋	1
薬035	1	薬252	3		
薬037	4	薬255	3		
薬038	2	薬264	1		
薬039	4	薬285	1		
薬043	1	薬297	2		
薬044	1	薬298	1		
薬052	1	薬307	1		
薬068	1	薬314	1		
薬128	1	薬359	1		
薬149	1	古代	19		
薬167	1	平安	3		
薬170	2	中世	5		
薬192	2	近世	14		
巴(中世)	17	近代	3		
巴(近世)	12	時代不明	1		
巴(近代)	2				
古代	33				
平安	8				
中世	2				
軒丸瓦計	189	軒平瓦計	210		

際立つ。十字廊の壺地業およびSX3126

など造営期の遺構からは薬師寺201型式をはじめとする奈良時代の瓦以外出土しておらず、十字廊の造営が奈良時代であることを示している。

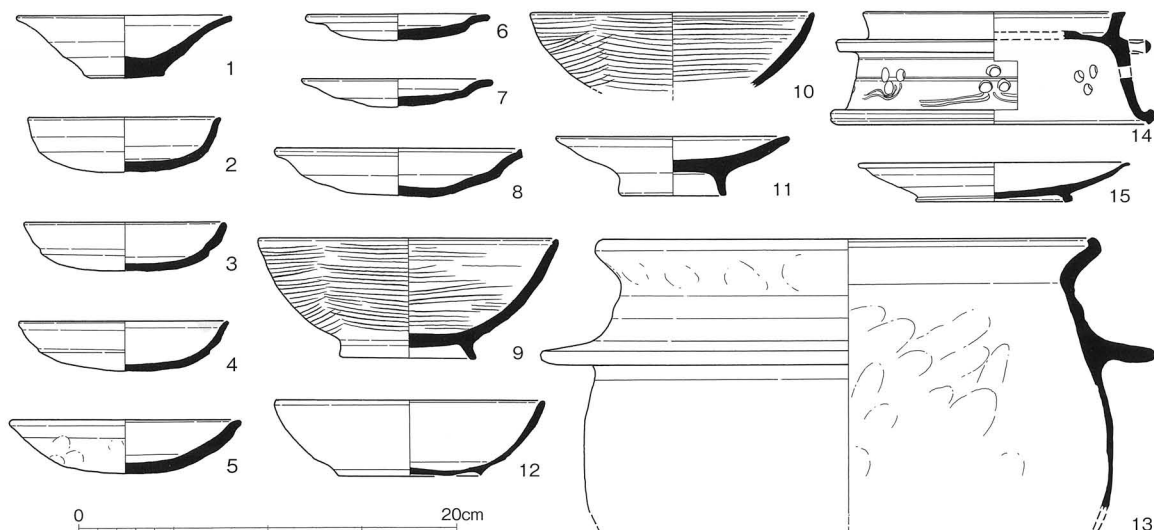
軒瓦に関しては、軒丸瓦は薬師寺2 b・18 b 型式、軒平瓦は薬師寺201・202型式が多い。十字廊の所用瓦としてまずこれらが候補になる。しかし、これらの瓦範の製作年代はいずれも奈良時代前半までであり、奈良時代後半とする十字廊の造営年代とは一見齟齬がある。ただし、特に薬師寺2 b、18 b 型式は改範されたうえ、全体的に範の痛みが激しい。こういった状況は長期間に渡る瓦範の使用を物語る。したがって、薬師寺2 b・18 b 型式と薬師寺201・202型式が十字廊造営まで製作された可能性は十分ある。現時点ではこれらの軒瓦の組合せを十字廊所用瓦として想定しておきたい。

(2) 土器・土製品

調査区全域から整理用コンテナ22箱分の土器・土製品が出土した。奈良・平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器、中近世の土師器皿、瓦器碗、瓦質土器などがあるが、奈良時代のものは少量であり、SK3117・SK3118をはじめとする10世紀後半から11世紀代の土器が中心である。以下、十字廊の廃絶および周辺の空間利用の実態を考える上で重要な資料を中心に述べる。

SK3118出土土器 SK3118出土土器は土師器杯・皿類を積み重ねて廃棄した状況が復元できる一括資料である。これらは複数の廃棄単位を復元でき、土坑に廃棄する際に、口径の近いもの、同形態の器種ごとに積み重ねて廃棄したとみられる。また、碗・杯・皿の供膳形態に限られる点、灯火器として使用されたものが多い点が特徴である。これらの様相は隣接するSK3117出土土器と同様である。

詳細については現在整理中であるため、SK3118の代表的な土器のみを図示した。2～4は杯。口径は10～12cm前後にまとまる。丸底の底部から丸みをもって口縁部が立ち上がるもの(2)と、口縁部と底部の境に段を持つもの(3・4)がある。4は口縁部にススが付着しており、灯火器として使用されたことが分かる。5～8は皿。口径9～10cm前後と12～14cm前後の大・小の法量分化が認められる。8は口縁端部に強いナデ調整を施し、端部は内側に小さく折り曲げる。これらの杯・皿は全て口縁端部以下をヨコナデで調整するe手法である。1は鉢。平底の底部から口縁部が大きく外反



第21図 出土土器実測図（1：4）

しながら開く。内外面にヨコナデ調整を施す。9は黒色土器B類碗。半球形を呈し、口縁端部に沈線状の段をなす。内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。やや外方へ開く高い高台を貼り付ける。

これらの土器は、皿に器壁の厚いものが目立つ点や杯・皿の口径が矮小化し、杯の法量分化が不明瞭になる点から、西僧房床面出土土器群よりもわずかに新しい様相をもち、10世紀後半から末頃に位置づけられる。

SK3113出土土器 土師器杯・皿とともに瓦器碗が出土した。10は瓦器碗で、内外面に横方向の密なヘラミガキを施す。川越編年の第Ⅰ段階にあたり、11世紀代のものである（川越俊一「大和地方の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』奈文研 1983）。11は高台付皿。口縁部が外方に開き、高い高台を貼り付ける。

SK3107出土土器 12は黒色土器A類碗。器壁が薄く、底部から丸みをもって口縁部が立ち上がる。断面三角形のごく小さな高台を貼り付ける。13は土師器羽釜。胴部が張る形態で、口縁部がくの字状に屈曲し、端部を内に丸く折り返す。幅広の鰐を貼り付ける。鰐下部および胴部にはススが厚く附着し、内面にも喫水線とみられる水平方向の変色範囲がある。10世紀後半から末頃に位置づけられる。

SK3132出土土器・土製品 14は圈足円面硯。堤部径14.0cm、器高6.0cmである。硯面が薄く、海部が浅い溝状を呈する。外面に突帯を巡らせ、脚端部は折り返し丸くおさめる。脚部外面に穿孔とヘラ描きを組み合わせて装飾を施す。穿孔は径6～7mmの円孔を穿ち、3点を山形に配して三つ星とする。これを上向きと下向きに交互に配する。また、円孔の下端付近から2条の波状のヘラ描き沈線を施す。これらの装飾は雲文を表現したものであろう。また、突帯には径約1cmの円孔を穿っており、筆立てとしている。外面の降灰状況から正位で焼成したことが分かる。15は灰釉陶器皿。体部が直線的に開き、口縁端部をわずかに外反させる。外面は底部から口縁部下位までロクロ削りを施し、断面が四角でわずかに外に開く高台を貼り付けている。内面全体に灰釉を施釉する。猿投窯編年の黒笹14号窯式に位置づけられる。なおSK3132からは、高台の断面形状が三日月形を呈する黒笹90号窯式に位置づけられる皿も出土しており、複数型式の灰釉陶器が混在して廃棄されていることが分かる。

(3) 金属製品等

瓦埴類や土器・土製品に比べ量は少ないが、銅・鉄・木・石製品、銭貨および植物遺体などが出土した。

銅製品としては、螺髪と考えられる銅製品1点が土坑SK3114から出土した（第22図）。高さ7.8mm、幅8.6mm、重さ1.2g。表面は部分的に明るい赤銅色の金属光沢を留める。先端部には孔があく。径2mm弱の棒状の銅を巻いて成形している。蛍光X線分析を実施した結果、銅（Cu）が強く検出された一方、錫（Sn）や鉛（Pb）、ヒ素（As）などの成分は検出されなかったことから、材質は不純物の少ない銅製であると判断された。

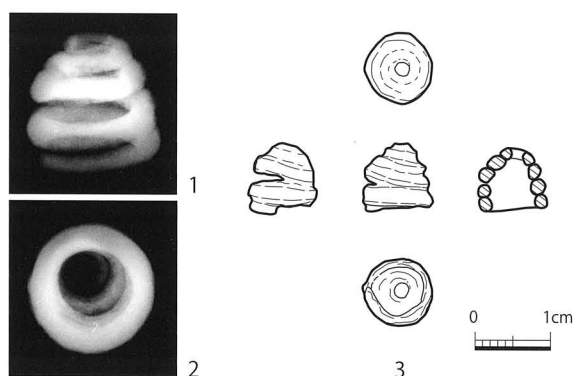
鉄製品としては鉄釘や鉄鏝が合計16点出土したが、十字廊と関連するのは土坑SK3132出土の鉄釘1点のみである。

木製品は近世以降の漆器椀や下駄、竹製の導水管や木製継手が溝SD3122からそれぞれ数点出土したが、十字廊と直接関連するものは出土していない。

石製品には石鍋片、碁石が各1点あるが、いずれも表土ないし耕作土からの出土である。

銭貨としては寛永通宝が1点、近世の溝SD3144から出土した。「寶」字の貝画末尾が「ス」である（ス貝寶）ことから、古寛永（1636-1659年）に分類される。

植物遺体は、自然木のほか樹皮や草茎、種実などが出土した。種実遺体では、土坑SK3114からヤマモモ炭化核とカヤ種子が各1点、溝SD3122からモモ核とウメ核、コナラ属果実が各1点、遺物包含層からマツ属球果が6点出土した。



第22図 出土銅製品のX線透過写真（1、2）および実測図（3、1：1）



遺物取り上げ作業風景